

グローバリゼーションと文化的繁栄

森村 進

生活形態には存続する権利があるという考え方——文化的集団殺戮という奇妙な観念に表現されている考え方——が道徳の舞台に登場したのは最近のことである。しかしこれはまた全面的に見当違いの考え方でもある。問題となるのは個人であって、生活形態はただ個人を表現し育成するものとして問題になるにすぎない。(デイヴ・イド・ゴティエ『合意による道徳』小林公訳、一九九九年、木鐸社、三三九ページ)

1 序

本稿の目的は〈自由市場経済の国際的な展開として理解されるグローバリゼーションは文化的な豊かさをもたらす〉と主張することにある。

私はこれまで著書や論文で、自由市場経済思想を重要な要素とするリバタリアニズムを自然権論道徳の観点と経済効率の観点から擁護してきたが、そこでは正義と効率とはまた別の文化的側面からの評価までは行っていない。しかし正義と効率の観点からは高く評価できても文化的に貧しい社会はありうるし、その逆に、不正義や非効率を抱えていても文化が花開いた社会もありうる。前者の例をあげるのは少々困難なようだが、後者の例としては、古代ギリシア・ローマ文明は奴隷制なしには存在しなかったとか、旧ソ連は多くのスポーツ競技やチェスの点では無敵だっ

たといった例を思いつくことができる。そして多くの人々はある社会を評価するにあたって、それがどれくらい人権を尊重しているかと平均寿命がどれくらい長いかと消費財が豊富かといった点だけでなく、その文化をも重視するから、リバタリアニズムの検討にあたっても、それがもたらす社会がいかなる文化を生み出すかを軽視することはできない。もしリバタリアンな社会の文化が貧弱なものになるとしたら、リバタリアニズムがその他の点でいかに高く評価されても、その弁護論は完全とは言えないだろう。しかし私は以下で、リバタリアンな社会は文化の点で必ず繁栄するとまでは断定できなくても一般的にその傾向があると主張する。私はかくしてリバタリアニズムの正当化を一層強化させたい。なおその議論全体において、Tyler Cowen の著書が大変役に立ったことを述べておきたい。

はじめに三つほど用語の説明をしよう。

第一は「グローバリゼーション」である。私はこの言葉を『有斐閣経済事典』（金森ほか [2004]）の説明に従って、「ヒト、カネ、そして情報の国境を越えた移動が地球的規模で盛んになり、政治的、経済的、あるいは文化的な境界線、障壁がボーダーレス化することによって、社会の同質化と多様化が同時に進展すること」として理解する。この意味ではグローバリゼーションは人類史上を通じて交易商人や宣教師や冒険家や戦士たちによって行われてきた普遍的な現象だが、今日の世界ではインターネットなど電子技術の飛躍的發展によって、かつてないほどに時間と空間の制約が弱まっている (Chanda [2007], セン [2009] 第1章も見よ)。つまり私は、現代のグローバリゼーションを特別に近代国家との関係においてとらえようとする（たとえば伊豫谷 [2002]）わけではないし、また反グローバリゼーションの主張者がしばしばするように（たとえば Stiglitz [2002]）グローバリゼーションを IMF（国際通貨基金）や WTO（世界貿易機関）や世界銀行といった国際機関の政策や、「ワシントン・コンセンサス」といったアメリカ政府の経済戦略に矮小化させる用語法もとらない。だから私の言うグローバリゼーションは、産業の国有化や強

制された経済発展や特定の価値観の押しつけとは両立しない概念である。そして私はボーダーレス化の中でも特に「市場経済が及ぶ領域も個々の市場の規模も、一国や一地帯でなく地球全体に及んできつつある」ということに着目する。つまり本稿の対象となるグローバルゼーションとは、市場経済の全地球的拡大のことである。なお上記の定義の最後の「社会の同質化と多様化が同時に進行する」という部分にも注目されたい。一般にグローバルゼーションは世界的な社会の均質化をもたらすという側面ばかりが強調されがちだが、それは後述するように同時に社会の多様化も引き起こすからである。

次は「文化 culture」である。本論の題名において、私はこの言葉によって、社会学で言うような生活様式一般を指すような広い意味での「文化」、キムリカ (Kymlicka [1995]) のいう「社会構成的文化 societal culture」を意味しているのではない。(ただその意味での文化についても後で少し触れる。) もしその意味で使ったら、文化の評価を行うことは極めて困難になってしまうだろう。私が「文化的繁栄」とか「文化的価値」という時の「文化」は、英語で言えば arts and sciences で、芸術・文学・学問などの産物とその生産・享受の過程を指している。それはたとえば「多文化主義」や「文化人類学」という言葉における「文化」よりも、「文化財」や「文化史」や「今ははやりない言葉だが」「文化国家」における「文化」に近い。それは人間の単なる生存にとっては不必要なものであり、あえて言えば趣味の領域にかかわるが、だからといってそれが社会的に重要でないと言う人はいないだろう。「文化」をこの意味で理解するなら、スポーツや料理やテレビ番組もその中に入れていい。

ただし芸術・学問の総称という意味での文化も、二つの異なった仕方では評価される。一つは、有形であれ無形であれ、制作された産物としての芸術的・美術的作品に焦点を合わせる作品中心的 (ergocentric) 視点からの評価である。もう一つの評価の仕方は、読者・観客・聴衆といった作品の享受者の体験を重視する (experiential)、福利主

義的 (welfarist) 視点からの評価である。どちらの視点をとるかによって、作品の評価は全く変わってくる。たとえばある絵画をごく限られた人だけが見られるか、あるいはそれを見たいと思うたくさんの人が見られるかは、後者の視点からは重要な問題だが、前者からはそうならない。前者では作品の芸術的価値はその作品に内在するものだと考えられるからである。ラートブルフは『法哲学』の中で、法の究極的目的を「人格価値」に見出す「個人主義的見解」と、「団体価値」に見出す「超個人主義的見解」と、「作品価値」(その中には美的価値と論理的価値が含まれる)に見出す「超人格的見解」という三つの見解を区別したが (Radbruch [1955] ch. 7)、この分類によれば作品中心的視点は超人格主義に、体験重視の視点は個人主義(の「ヴァージョン」)に属する。我々は過去の文化や外国の文化を評価する際はもっぱら作品中心的な視点に立つが、自分が生きている同時代の文化を評価する際は、自分自身が消費者であるため体験重視の視点をとる傾向がある。そこで私は本稿では、作品中心的視点を無視はしないが体験重視の視点を優先させたい。というのは、個人的な信念の問題としてはともかく、社会道徳的観点からは、人間あるいはもう少し広く有情の生物の福利から全く独立した、純粋に芸術的・学問的な価値を、政府が税金を使って追求すべき理由があるとは考えにくいからである。

そこで次の問題に移る。具体的に何をもって文化の「繁栄」とみなすべきだろうか? いかなる基準によって、文化的な作品と活動の価値を判断すべきだろうか? もし文化作品の享受の体験を重視する視点をとるならば、作品中心の視点よりはまだこの問題に答えを出しやすい。当該社会の人々が文化の享受によって得る福利が大きければ大きいほど文化は繁栄していると考えることができる。そしてさらに、人が芸術作品から得る福利がその作品の消費のために支払う金額と結びついているならば、芸術的価値と経済的価値すなわち市場価値とは一致する、あるいはそこまで行かなくても両者間には密接な正の相関関係がある、ということになる。芸術的価値の高い作品には高い値段がつ

き、そうでない作品は安くしか売れなかったり、あるいは全然売れなかったりするものである。

しかし体験重視の視点を取っても、消費者の芸術的体験は、本人にとつての主観的な快樂ではなくもつと客観的な基準によつて評価されるべきだ——たとえば、低級な消費者の好悪ではなく鑑識眼を具えた人の判断が尊重されるべきだ——と考えるならば、芸術的価値と経済的価値とは別物である、それどころか対立しやすい、という結論に至るだろう。経済学の発想は前の段落の発想と結びつくが、多くの芸術家や芸術愛好家はこの段落で述べた命題を信じているようだ。そこから、市場では正しく評価されない芸術・文化を政府は支援すべきだという信念も出てきやすい。

私としては、経済学的アプローチが芸術のまもっている神秘的なオーラやスノビズムを消滅させるといふ脱魔術化・非神話化の健全な機能を持っているということは高く買うが、それでも最初に述べたように、自由市場経済を単に効率性基準だけでなく文化的繁栄によつても評価したいのだから、芸術的価値を単純に市場価値と同一視するつもりはない。文化の享受の中には貨幣的価値の形で表れにくいものもある。たとえば著作権が切れた著作を読むことから得られる効用がそうである。文化的価値と経済的価値を同一視しないこの態度こそ、一番徹底した功利主義者や経済学帝国主義者以外の大部分の人々が持っているものである。

ではいかなる評価基準を取るべきだろうか？ 私はこの問題について何か独自の見解を持っているわけではない。そこで無用の論争を避け、なるべく多くの人々に納得してもらえように、〈ある分野に関する専門家や評論家や愛好家たちが、偏見なしに長期的に高く評価するものには大きな文化的価値があり、その逆のものには価値が乏しい〉と想定してみよう (Cowen [1988] pp. 6-9)。これはいかにも漠然とした基準のようだが、それよりもよい選択肢は見つけにくい。実際そのような基準は日常生活だけでなく、学問の世界においても用いられている。たとえば「民主主義」は論争的な概念で、人によつてそれをどのように理解するかは千差万別だろうが、それでもどの国が相対的に

民主的でどの国が非民主的かについてはかなりの意見の一致がある。またピア・レビュウという制度もこの発想によっている。それにこの想定を取らなければ、我々は自分自身が十分な知識を持っていない文化の諸領域について何の判断も——暫定的な判断さえ——下せないだろう。

この文化的価値の中には、製作者の純粹な創作欲や「自己表現」の欲求や名誉欲や金銭欲の満足までは含まない。これらの満足も本人にとっては価値があるが、それだけならば本人以外の人が文化をありがたがる必要はないからである。しかし次の節の初めで述べるように、これらの満足は、文化的活動を促す原動力としては重要な手段となりうる。なお文化的価値、特に芸術的価値は「*美 the beauty*」と呼ばれることが多いが、美しさ以外にも、面白さ、こっけいさ、崇高さ、かわいらしさなど多様な価値があるのだから、「美」ですべての芸術的価値を代表させることはできない。

2 グローバリゼーションはなぜ文化の発展を助けるのか

グローバリゼーション、もつと一般的には市場経済の拡大は文化の繁栄に資する傾向がある。その原因は、文化的活動の生産と消費の両面に存在する。まず生産の面から見ていこう。

一 金銭的報酬と名声への欲求

文化的産物への金銭的報酬は制作への大きなインセンティブになる (Cowen [1998] pp. 18-19)。文化市場のグローバリゼーションは、生産者に一層大きな報酬の機会を一層広い範囲で与え、文化的生産を促進する。この事情は、

文化的な生産者もそれ以外の生産者と変わりがないし、凡庸な芸術家にも偉大な天才にもあてはまる。テイツイアーノもモーツァルトもバルザックも金目当てに制作した。それを理由に彼らの芸術の価値が乏しいなどと言う人はいないだろう。文化が十分に商業化されていない社会や、商業化されていても市場がごく小さい社会では、著作家や芸術家は市場での収入を十分期待できないために、権力者や大金持ちをパトロンの選ばれるをえないことが多かった。ホップズの『リヴァイアサン』もその一例だが、近世ヨーロッパの著作にしばしば貴顕の士への追従めいた序文がついているのはそのためである。もともと当時でもパトロンの中には、自分が庇護する芸術家に対して寛容で自分の趣味を押しつけない人や、優れた鑑賞眼によって芸術家の創作活動を刺激するような人もいただろうし、庇護を受ける芸術家も自分の芸術的良心を大切にしたらだろう。

しかし市場経済の中で文化的製作から経済的利益が得られるようになると、一層多くの人々が文化創造にたずさわれるようになった。その多くは政治的・社会的に周辺化された人々だった (Cowen [1998] pp.29-30)。参加者が多くなった結果、作品の内容が多様になっただけでない。一層多くの製作者が同じ分野に参加して互いに競争することは、その水準を高める。かつては素人に毛がはえた程度の人でも、パトロンの持てば、あるいは旦那芸としてやっていたら、いっぱしの芸術家のつもりでいられたのが、ごく高度の作品を作らなければ専門家として認められないようになるのである。

文化の領域では金銭的動機に加えて、名声という動機も同じくらい重要である。このように高度に個性的な資質が重要である分野における成功は、通常のビジネスや職業における成功よりも大きな知名度をもたらす。そして文筆家や芸術家の中には特にこの誘惑に弱い人が多い。デイヴィッド・ヒュームはその短い自伝の中で、自分は穏やかな情念の持ち主で、自分の支配的な情念は「文筆上の名声への愛情」だと書いたし、「芸術と学問の発達について」でも

「競争に次いで、高貴な芸術を最大に奨励するものは称賛と名譽だ」と述べていた (Hume [1985] pp. xi, 136)。前近代の芸術家の中には無名に甘んじる人が多かったようだが、現代ではそのような人は職人の中にもいても、芸術家の中には少ない。彼らの多くは、積極的に自己宣伝をして自分の名前が広く知られるように努めるが、それはあながち金銭的な理由だけでなく、世間にドーダと自分を見せびらかしたいという欲求から来ている。

文化の商業化は文筆家や芸術家に金銭的報酬で報いるだけでなく、この名声という心理的報酬も豊かに与える (名声の社会的・個人的意義については Cowen [2000] を見よ)。というのは、スターを作ることが人々の関心を集め消費を促すため、文化産業は芸術家を売り出し、セレブ化させる (celebrate) からである。経済的な富と同様に名声も、全体量が一定でその分配はゼロサムだと考えるべきではない。特定の文化の分野にスターが登場することは、同一分野の他の人々にも脚光を当てることになる。「勝者がすべてを取る」わけではないのである。そしてある分野が人々の関心を集めるからといって、必ずしも他の分野への関心が低くなるとは限らない。人が文化の領域に関心を持てば持つほど、それに対応して名声を持つ人も増えていく。文化的名声の総量は無限ではないが一定でもなくて、文化の発展に応じて大きくなるだろう。

二 生活の保障

このように私は「金銭や名声に無関心な芸術家」というロマン主義的芸術家像は現実的でないと考えるが、そのことは文化的創造がすべて金銭的な動機か名声への欲求によってもたらされているという趣旨ではない。いかなる生産活動もこれらの動機以外のさまざまな動機を持ちうる。その動機の内容は場合によって異なり一概に言えないが、一般的に文化的生産はそれ以外の工具やオフィスワーカーや販売員の「普通の」労働、さらに3Kと呼ばれる労働に比

べて、金銭的動機が弱く、制作欲と表現欲の動機が果たす役割が強いということはいえるだろう。それは本人にとってやりがいのある仕事である。また文化的活動の方が労働時間を自己管理できるという傾向がある。

これらの事情から、多くの芸術家や学者は、他のもっと散文化的な仕事をすれば得られるだろう収入よりも少ない収入で満足する傾向がある。それに加えて、〈芸術家というものは金銭的報酬に過大な関心を持つべきでない〉という期待が強い社会も多い。貧乏な芸術家が多いのはこれらの原因による。そのため芸術への助成金や寄付は、それがなければ芸術家にならなかったはずの人々を芸術家への道に引き込むことによって貧困を悪化させている (Abding [2002] *op. cit.* 6) という見方も生まれる。おそらくその判断は正しいのだろう。しかしそのような貧困は、芸術家が自ら選んだライフスタイルに起因するものだから、社会的問題ではなく彼ら自身の問題である。誰も強制されて芸術家になったわけではない。むしろ問題は、政府がそのような支援をすると、納税者は自分が関心を持たない文化活動に寄与するよう強いられるということである。それに対して、支援が民間部門でなされるならば問題は生じない。

また市場経済の発達は人々の生活水準を向上させるために、副業として文化的生産にたずさわることを可能にした (Cowen [1998] pp. 16-18)。日曜作家や日曜画家、市井の学者を叢生させたのである。これらの人々は文化的活動・制作(だけ)によって生活することがないために、商業的圧力から比較的自由に、自己の創作欲に従って創造ができる。ただしこのことは必ずしも、彼らの作品の方が職業的芸術家作品よりも芸術的に優れているということを意味するわけではない。商業的圧力は、多くの消費者たちの価値判断を反映しており、芸術家自身の独善的判断や自己顕示欲を免れているために、作品の経済的価値だけでなく芸術的価値を向上させるためにも役立つかもしれない。〈作者こそが自分の作品の最善の判定者だ〉ということとは必ずしも言えない。

三 技術的進歩

多くの芸術は専門的な材料や道具を必要とする。音楽のためには楽器が、絵画のためには画材が、演劇のためには劇場設備や大道具小道具や衣装がある。これらの材料や道具の費用は文化的生産に財政的制約を課してきた。しかしテクノロジーの進歩は材料と道具を安価にして、多くの芸術家にとって手の届くものにした。より頑丈や材料や便利な道具は芸術作品の質の向上に役立った。技術的發展はさらにそれまで存在しなかった新しい道具や機械や技術を生み出し、芸術の可能性を拡大させる。そのようにして写真とか映画といった芸術のジャンル自体が生まれたのである (Ibid. pp. 19-29)。

文学と著述の分野でもテクノロジーの進歩は重要な役割を果たしている。かつては紙自体が高価なものであったので、書物の出版はむろんのこと、執筆自体にもかなりの金銭が必要だった。もっとさかのぼれば、印刷術の発明と進歩が書物の大量生産を可能にして、著作者や読者の数を飛躍的に増やしたことは言うまでもない。我々自身の時代には、ワードプロセッサとパソコンのおかげで、多くの人々は手書きで原稿を書くことをやめ、キーボードを叩いて執筆している。そのため執筆の速度は向上し、ペンを持つ手が痛くなることもなくなった。

ただし手作業や身体的パフォーマンスのようなローテクの労働集約的な芸術では、テクノロジーの進歩がもたらす恩恵は少ないかもしれない。だがこれらの分野も、時間と空間という制約の除去という意味のグローバル化から間接的な恩恵を被っている。

たとえば複製技術や印刷や情報保存技術の進歩は、人々が過去の文化や遠く離れた場所に存在する作品に接する機会を多くした (Ibid. pp. 30-32)。我々はアマゾンや本屋やCDショップを利用して、いつでも簡単に古今東西の最高レベルの芸術作品やその演奏に接することができる。わざわざ遠く離れた図書館やコンサート会場に出かける必要は

ない。このため消費者が自分の目を肥やしたり、芸術家が過去の伝統に学んだり影響を受けたりすることがたやすくなった。昔の映画愛好家よりも今日の映画マニアの方がはるかに過去の映画について詳しくなれる。もっとも後述するように、文化産業は同時代性を重んずるため、過去の作品と伝統から得られる恵沢を現代の芸術家や消費者が十分に利用しているとは言えないかもしれないが。

同時代の他の社会との交流が文化的生産にもたらす恩恵については以下で述べるが、その前に、医療の発達のために平均寿命が長くなり、大部分の学者や芸術家が壮年や時には老年までも活動を続けられるようになったという変化にも触れておくべきだろう。過去の芸術の歴史には、ワーズワースのように十二分に長生きした人もいた一方、それ以上にキーツのように病気で夭折した天才が多かったが、今日の芸術家は、加齢とともに才能と制作意欲が枯渇することはよくあっても、自分から破滅的な生活をしない限り、めったに夭折しない。キーツが現代に生きていたら、彼は世界にもっとたくさんの素晴らしい詩を残せただろう (Ibid. p. 20)。

四 他の社会との接触による文化の変容

グローバリゼーションと必然的に結びついた事情として、他の社会との交流があげられる。学問も芸術も、国際的な接触から多くのものを受け取ってきた。私が相対的によく知っている国の例をあげると、アマティア・センが言うように、「日本の歴史は、グローバルな相互交流に開かれた心で対応することがいかなる利益や恩恵をもたらすものであるかを明示して」いる (セン [2009] 27 ページ。もっと懐疑的な見解として Gray [1998] ch. 7)。前近代の日本是中国の文化や技術や法・行政制度や宗教を取り入れ、それを自分のものにした。たとえば中国語と全く異なる日本語を表記するために、漢字および漢字から発生したかな文字を使ってきた。徳川時代には海外の文化の摂取は限られ

ていたが、明治維新以降の日本は、民も官も積極的に西洋の文化を取り入れそこから取捨選択することによって、おむね成功裏に産業と経済と文化を——政治は違うだろうが——発展させてきた。日本の学問、文学、美術、建築から、海外の影響を少しでも受けたものを除いて純粹に土着のものだけを残したならば、日本の文化ははるかにプリミティヴで貧弱なものになってしまっただろう。

グローバリゼーションは国際的にメジャーな文化を世界中に広げるといふ面だけでなく、同時にローカルな文化を世界中に拡大するという側面も持っている。食文化で言えば、マクドナルドは世界中に店舗を拡大したが、地域によってマクドナルドのメニューは少しずつ現地化して異なっている (Ritzer [2004]、さらにデイズニランドについて Bryman [2004] も参照)。またマクドナルドと同様、スシやピザのように最近までローカルだった料理も世界中で食べられるようになったし、それ以前からカレーや中華料理は地元のインドや中国以外で親しまれていた。このようにしてグローバリゼーションの過程でグローバルなものが各地の需要に応じてローカル化し、ローカルなものやエスニックなものがグローバルな市場の中で変容しながら受け入れられるという現象は「グローカリゼーション (glocalization)」と呼ばれる (Robertson [2007]、また Friedman [2007] ch. 12 も見よ)。

グローバリゼーションはこのように、文化の領域でもアイデアや作品の相互影響を通じて人類の生活を豊かにしてきた (Cowan [2002] esp. ch. 2)。文化的な繁栄と高い自給率とは両立しがたい。

もっともこの事情は文化・芸術のジャンルによって程度が異なるだろう。異質な「他者」との出会い・接触を無条件に称揚するような論者の中には、他者との交流なくして発展はないと主張する人もいるかもしれないが、私はそこまで言うつもりはない。グローバリゼーションが果たしうる意義は、文化のジャンルによってまちまちだろう。たとえば前衛美術や純文学のように無定形なジャンルでは、異質の発想や感覚や方法との交流が有益かもしれないが、能

のように、定まった様式と内容を持ち少数の熱心な愛好家によってはぐくまれ、独自の洗練を遂げてきたような芸術ジャンルでは、外からの影響による進歩は期待困難で、グローバリゼーションが影響を及ぼす程度は限られているだろう。しかし後者の分野でさえも、商業化やグローバリゼーションは需要の拡大に役立ちうる。その結果、エスニックな音楽や伝統芸能は元来の地方に限られない広範な愛好者を得て滅亡を免れたり、一層繁栄したりしうるのである。また他の社会との接触によるこの恩恵は、相対的に孤立していた社会において著しく、コスモポリタンな先進社会ではそれほどでもないかもしれない。なぜなら前者の社会では他の社会から新たな技術や様式や観念を取り入れて利用する機会が膨大だが、後者の社会ではすでに多様な社会の文化の要素が利用できるで、さらにまた別の社会と接触しても、そこからしか学べないものは多くないだろうからである。グローバル化の限界効用は逓減する傾向がある。このために、人々がグローバリゼーションから得られる文化的利益は、文化の先端の地域よりもむしろ発展途上の地域において、また大きな市場を持つ社会においてよりも、むしろ市場が小さな社会において、相対的に大きいという結論が出てくる。グローバリゼーションはしばしば信じられているように途上国の人々の犠牲において先進国の豊かな人々を富ませるのではない。むしろ発展途上の地域こそグローバリゼーションを一層必要としているのである。

五 消費者の豊かさ

文化の生産から次に消費の面に移ろう。もっとも「消費する consume」という言葉は財を使い切ってしまうようなニュアンスを持っているが、食物を食べたり建造物を作ったりするのは違つて、本を読んだり絵を見たり音楽を聴いたりすることはその対象を使い切ってしまうわけではないから、私はむしろ「享受する enjoy」という言葉を使いたい。

自由市場経済は、人々の生活を物質的に豊かにして、可処分所得と自由時間を増大させてきた。一日の長さはどの誰にとっても二十四時間だが、労働時間は短くなり、家事の苦労は科学テクノロジーによって減少し、人々が文化の享受のために費やすことのできる財も時間も増加した。このことは文化産業の発展に寄与する。それに加えて、商品の大量生産や複製が容易になり、情報も手に入れやすく処理しやすくなり、さらに輸送費用が低くなったので、すぐれた文化作品が安価に入手できるようになった。かつては一部の上流階級と芸術家・学者自身のものでしかなかった文化が、中流、いや大衆の手の届くものになる。むしろ今日の自由市場社会でも（過去の社会と同様）貧富の差や地域格差が厳として存在し、文化へのアクセスには不平等があつて、享受の機会に相対的に恵まれた人々と恵まれな人々がいることは事実だが、後者の人々でさえ、市場化とグローバリゼーションから利益を受けている。

しかし文化市場の拡大を歓迎すべきことと考える人々も、文化的保守主義者の中には多い。たとえばホルクハイマーとアドルノは文化産業の発展が文化をむしろ損ねていると嘆いてゐた（Horkheimer and Adorno [1947]）。この立場に対しては後述3節3で答えるが、仮に文化の商業化が低俗な文化をはびこらせているとしても、その一方でエリート文化が衰退しているわけではなく（Cowen [1998] pp. 32-33）。たとえばクラシック音楽は歴史上のいかなる時代よりもたくさんの人々によって世界中で聴かれている。一般的に言つて、多くのエリート文化は決して誰にでもすぐわかるというものではなく、習い覚えた趣味（acquired taste）であり、その享受のためにはそれなりの学習や先行投資が必要だが、豊かな社会ではそのための機会も資源も増大する。またどんな社会にも、エリート文化を理解し楽しもうとする人々がいくらかは存在する。エリート文化と大衆文化がゼロサムゲームの取り分を取り合っているように考えてはならない。いずれのタイプの文化も人間には必要だが、いずれも自由市場社会で繁栄できるのである（Ibid. pp. 40-43）。

六 ロングテール化とニッチの存在

今述べたように文化的商品の生産・複製・流通のための費用が低くなって、文化市場は拡大してきた。その結果、生産者は特定の裕福なパトロンの多数派の消費者の需要だけに応える必要がなくなる。また文化の市場化はスターの収入と名声を一層高くするが、それと同時に、ジャンルの差別化を促進する。たとえば、小説の中でミステリというジャンルが発展するだけでなく、ミステリの中でも謎解き（「本格」）とかスリラーとかハードボイルドとか警察ものといったふうに、様々のタイプのジャンルが分化し、さらにその中で作家はそれぞれの個性を出そうとする。これらの原因から、市場化は文化の各ジャンル内における第一人者の作品を突出して普及させるだけでなく、相対的に小さな需要にも応えることによって文化の多様化に資する（文化市場における独占を危惧するFrank and Cook [1995], esp. ch.3とFriedman [1999] ch.12の悲観論に対し）、Cowen [1995] pp.52-7, 130f.とAbbing [2005] ch.5の反論を見よ）。

あまり売れない商品でも物流コストが低ければ、売り上げの集積によって採算がとれるという現象をロングテール（long tail）と呼ぶが、この現象は文化の領域で特に重要である。少数派の文化や「カルト」文化の消費者も、大きな市場の中ではそれなりの規模を持つので生存可能なニッチが形成され、芸術家はより多様な需要に訴えかけることができる。たとえばSFや古楽といった文化ジャンルの愛好者は特定の地域に固まっているというものではなく、たくさん地域に散在しているが、どの地域でも人口に占める割合はごくわずかだろう。彼らはどこでも文化的なマイノリティである。市場の拡大は、これらの愛好者のそれまで無視されがちだった需要に応えることになる。

共同体主義者や保守主義者の中には、ユニークな文化の伝統というものは必ず特定の地域と結びついたナショナル

がローカルなものであるかのように語る人が少なくないが、それは一面的である。文化は地域によって同定されるとは限らない。コスモポリタンだが少数のマニアにしか訴えかけない文化というものもある。少数の愛好家だけに訴えかける文化ジャンルの中には、直前で述べたエリート文化に属するものもあれば、オタク文化のようにサブカルチャーに属するものも、カウンターカルチャーに属するものもあるだろう。メジャーな文化とマイナーな文化の区別は、ハイ・カルチャーとロー・カルチャーの区別とはまた別の分類である。

かくして市場の拡大は社会内部の文化の多様性を高める。社会や国家の連帯や一体感を重視する人々から見ると、その内部でたくさんマイナーな文化が栄えることは人々を閉鎖的なグループの中に孤立させ共通の関心を失わせるので望ましくないと思われるかもしれない。だが人々が持つ文化的関心がそれぞれ異なる限りで、それはむしろ当然の状態である。市場の発展がもたらす文化的多様化は、市場が一地方や国内だけに限られていても言えることだが、グローバル化するとさらに顕著になる。人は自国内だけでなく、それまで全く知らなかったような海外のエキゾチックな芸術にも簡単に触れられるようになる。その際、文学のように言語という表現手段それ自体が交流の障壁になって、言語ごとに独立した市場が形成される文化ジャンルよりも、直接に感覚に訴えかける美術や音楽や食文化の方がグローバル化に一層適する。本は自国語のものしか仕事以外では読まないという人は多い、というよりも大多数だが、彼らも外国の音楽にはたやすく耳を傾け、エキゾチックな食事を味わうのである。映画やテレビは両者の間のどこかに位置する。

3 文化的ペシミズムの原因

以上では市場経済の拡大、特にグローバリゼーションがどのようにして文化を豊かにしているかを述べてきたが、実際にはグローバリゼーションが文化を貧しくしていると考える悲観論者も少なくない。以下では悲観論の理由を批判的に検討しよう。

一 画一性か多様性か？

文化の商業化の批判者は、それは商業的利益をもたらす文化ばかりを繁栄させて、文化の画一化をもたらすと考える。特にグローバリゼーションはアメリカや西洋の文化を世界中におしつけてローカルな文化を滅ぼし、文化的アイデンティティを失わせるというのである（たとえばGray [1998]；Barber [1998] ch. 3；Klein [2000]）。彼らの嘆き節の中で槍玉にあげられることが多いのは、食文化におけるマクドナルドとスターバックスとコココーラ、映画におけるハリウッド映画、文学におけるブロックバスター小説である。文化的グローバリゼーションの批判者の多くは民族主義者¹¹ 国粋主義者か多文化主義者で、彼らはもっぱら地域あるいは民族（エトノス、ネーション）レベルで同定される文化の保存を重視し、それらの多様性をグローバリゼーションによる画一化が脅かしていると考えようだ。

しかしこの立場には次のようないくつもの欠陥がある。

第一に、文化の多様性は地域や民族のレベルだけで考えられるべきものではない。2 節四で触れたように、地方や民族の境界を越えるコスモポリタンな文化もたくさん存在する。また一つの国や一つの地域や一つのエスニック集団

の中にも、文化的多様性は厳然として存在する。ある国家や民族の成員のすべてがその中の主流の文化や伝統的な文化に親しんでいるわけではない。いやそれどころか、ナショナリストや多文化主義者が重視する独自の文化の中には、その社会内部でさえ少数派になっているものが少なくない。現代日本人の多くは伝統的な邦楽よりもポップス（それがJポップであれ）に親しんでいる。文化におけるグローバリゼーション批判者たちは、文化的多様性一般を求めているのではなくて、実際には特定の一部の伝統文化の保護を求めているにすぎない。

第二に、すでに2節六で述べたように、豊かな社会では多数者の文化と少数者の文化やカルトな文化は対立するものではなくて補い合うものである。確かにグローバリゼーションのおかげで、多数派のいくつかの作品や商品は世界中で消費されるようになるかもしれないが、その一方でローカルな文化も世界中に影響を及ぼすというグローバリゼーションが進む。このグローバリゼーションは少数派の文化だけでなく多数派の文化にも変化をもたらす。外国の「スシ」は本物のすしでないと眉をひそめるような純粹主義者はその変化を好まないかもしれないが、変化なくして創造はありえない。程度の差はあれ、歴史を通じていかなる文化も——芸術という意味であれ、社会構成的文化という意味であれ——他からの影響を受けて変化してきたものである。文化の保存・研究・普及・伝達のために博物館は重要である。しかし文化を新たに創り出してきたのは博物館ではなくて著作者や芸術家である。多くのナショナリストや多文化主義者は、文化が本物であるということ（authenticity）とルーツにこだわるが、それは集団的アイデンティティの承認という政治的な目的に発するところが多い。むしろ真正さへのこだわりは、普遍性ある文化的価値や創造性とは対立しやすい。

もともと批判者は、文化や伝統が変わっていくものだということは認め、変化すべてを否定するわけではないが、グローバリゼーションによる変化は低俗化と均一化に向かう変化だからよくないと主張するのかもしれない。この主

張はあとで検討しよう。

第三に、批判者が嘆くような画一化や平準化は別に誰かが無理やり押しつけたものではなくて、人々が自発的に選んだ結果である。ハリウッドの映画（の一部）や『ハリー・ポッター』シリーズが世界中で人気があるのは、それだけたたくさんの人々が、金を払ってでもそれを見たり読んだりしようとするからである。その一方、アメリカで成功した商品でも、いくら宣伝をしようが、人々の好みに合わないものはヒットしない。ＴＶドラマ『ダラス』はアメリカ以外の国々でも人気を博したらしいが、日本では失敗に終わった。それと同じことが、ローカルな文化の世界化についても言える。日本のマンガやスシは外国でも受け入れられるが、日本の中でしかマーケットを持たない文化のジャンルもまた多い。文化のグローバリゼーションとローカリゼーションから特に大きな利益を得るのは、広い文化的関心とコスモポリタンな感性を持つ人だろうが、特定のユニークな文化にどっぷりとつかった人でも他の文化の産物を享受でき、それは生活を豊かにする。我々は信心を全然持たなくても、宗教建築や宗教美術や宗教音楽に感銘を受けることができる。文化的グローバリゼーションは社会における消費者の自由な選択の結果だから、それを制限することは人々の自由への侵害に他ならない。

第四に、確かにグローバルなレベルでは文化の多様性は少なくなっているかもしれないが、ミクロのレベルでは多様化している。グローバリゼーションは人々に対して、それまでの伝統的な文化だけでなくたたくさんの異なった文化の選択肢を与える。世界各地の食生活はカレーやピザやスシやマクドナルドの普及によって次第に似通ってきただろうが、その一方、個々人にとっては過去よりもはるかに多様なものになってきた。民族間の相互の交流がごく限られていた、たとえば今から十世紀前の世界は現在よりもはるかに多様で異質な諸文化を含んでいただろうが、その住民は自分の住んでいる社会以外の文化にほとんど触れられず、その存在さえも知らなかっただろう。そして特定の伝統

文化が支持者の少なさのために消滅するとしても、それはどれほどの悲劇だろうか？ 室町時代に栄えた幸若舞は幕

末から維新の動乱期に幕府の庇護を失ったため滅びたが、そのことを取り返しのつかない文化的喪失だったといって嘆く人は私は寡聞にして知らない。人類史上たくさんの伝統文化が消滅し、その一方ではたくさんの文化が変化し、また生まれてきた。この地球はたくさんの伝統文化を保護する生きた人類学博物館だと考えるなら、人々は自分が生まれ落ちた文化の中で純粹培養されて伝統を将来に伝えるために生きるべきだということになるだろう。しかしむしろ世界は、人々がそれぞれの生活を送り、文化作品を創造し享受する場である。旅行者は僻地の社会の古めかしさを喜ぶかもしれないが、そのことはその住民が自分たちの生き方を選ぶ自由を制限する理由にはならない。グローバリゼーションによる文化の変化は肯定的に評価されねばならない (Coven [2002] esp. chs. 3-6; Leadbeater [2002] esp. ch. 8; Norberg [2003] ch. 7; Bhagwati [2004] ch. 9; Palmer [2009] ch. 16)。

第五に、コスモポリタニズムの批判者は社会と文化の画一化を誇張する傾向がある。いくら情報伝達の技術が進んでも、大部分の人は簡単に外国に移住したり外国語を自由に使ったりするようにはならない。自分が生まれ育った社会と自然環境の中で暮らしていくのである。英語が国際社会の共通語になっても、英語を母国語にしない人々のうち、日常的に英語を読み書きするのはごく一部である。グローバリゼーションは世界中の文化をある程度は似たものにしてきたが、それを同質化と呼ぶのは甚だしい誇張にすぎない。特に大きなマーケットを持つローカルな文化は近い将来消滅する見込みはない。世界中どこでもが無趣味なアメリカの郊外のようになってしまうなどと心配する人もいるが、それは杞憂というものである。

グローバリゼーションを文化の点で批判する論者の中で、ジョン・トムリンソンはグローバリゼーションの問題点を、特定の文化の押し付けという文化帝国主義ではなく、むしろ文化的な目的や方向づけの欠如に見出すという点で

ユニークである (Thomlinson [1991], ただしコスモポリタニズムという文化的気質を政治的理由から批判する Thomlinson [2000] ch. 6 も参照)。私はトムリンソンによるグローバリゼーションのこのような特徴付けにおおむね賛成だが、グローバリゼーションに対する評価は彼と反対である。私はグローバリゼーションが何の特定の文化的価値とも結びついていないことをむしろ美徳とみなす。グローバリゼーションは各人が文化を享受し文化に寄与することを助けるが、いかなる目的や価値を求めるべきかを指図するわけではない。この文化的中立性はリベラリズムの観点からは歓迎すべきものである。

二 趣味の低下・通俗化

グローバリゼーションへの文化的批判は、画一化の想定から来るものだけではない。

文化の商業化を批判する人たちは、商業的な制作活動は経済的利益を求める圧力を受けるので、芸術的に低俗なものになると考えている。この想定が自由市場における需要の多様性とそれが可能にする文化的創造とを無視したものであることはすでに第2節で指摘したが、彼らの誤りはそれだけではない。彼らはまた、経済的圧力を受けない制作活動の方が商業的な制作活動よりも高い価値を持つかのような幻想を持っている。実際には商業的な制作の場合、誰も買う気にならないような作品がたやすく認められないので、その道の権威の審査や査読などなくても最低限のレベルは保たれがちだが、非商業的な作品の場合は需給関係によるコントロールがないので、製作者本人の自己満足でしかないような作品が垂れ流される恐れが大きい。この事情を実感するには、たとえばインターネット上の言論と商業的な出版物の中の言論を比較してみるとよい。平均的に見て、前者のレベルが後者のレベルを上回ると考える人はいないだろう。もっともインターネット上でも価値ある言論を見出すことはできるが、多くの場合、それはインターネッ

トだけで発信している人ではなく、商業的メディアに既に登場した人によるものである。また読書マーケットが大きい社会では、自費出版本と商業的に出版された本を比べれば、一般的に言って後者の方がはるかに質が高いだろう。あなたが最後に自費出版本を自分から進んで読んだのはいつですか？

また大衆文化の批判者が無視しがちなことだが、大衆文化が存在しなかったり弱かったりする社会では、大衆の大部分はそもそも自分が享受できるような何の文化にも接することができない。そこでは文化の水準は高いように見えるかもしれないが、それは文化の享受者が特権的な少数者に限られていたせいである。それに対して大衆文化が一般化した社会では、かりに文化の全体的な水準は低くても、高い文化も立派に生き残るし、多数派の大衆は自らにふさわしい文化を享受できる。ミーゼスが言うように、

普通の人が普通でない書物を味わわないということは資本主義の欠点ではない。……

偉大な著者や芸術家への畏敬の念を持つのは、いつでも限られたグループだった。資本主義を特徴づけるものは、大衆の悪趣味ではなくて、これらの大衆が資本主義のおかげで豊かになり文学の——むろん、低俗な文学の——「消費者」になったということである。書籍市場は半野蛮人のために書かれた下らない小説で溢れかえっている。しかしだからといって、偉大な著者が不滅の作品を作り出すことが邪魔されているわけではない。

(Mises [1972] pp. 52, 79)

大衆文化の低俗さと浅薄さについてはアドルノとホルクハイマーのように「教養」の高みからいくらでも好きなように悪口を言えるだろうが (Horkheimer and Adorno [1947] ch. 4)、ともかく消費者に金を払って本を読んでもらっ

たり音楽を聴いてもらったりするということは大したものである。大衆文化は文化的エリートのためではなく大衆のためにある。おそらく文化的エリート主義者は、低俗な文化など存在しない方がいいと考えているのだろうが、ロー・カルチャーもないよりはいい Low culture is better than no culture というのが私の立場である。（なおアドルノとホルクハイマーの大衆文化批判の章は「文化産業——大衆欺瞞としての啓蒙」と題されているが、その副題はミスリーディングである。彼らの主張によれば、大衆は文化産業に騙されているのではなくて、むしろ自らが正に求めている低俗な娯楽を文化産業から受け取っていることになる。だからホルクハイマーとアドルノは首尾一貫するなら、文化産業だけでなく、その成功を可能にした無教養で傲慢な大衆をも現代文化の墮落の共犯者として非難すべきだった。日夏耿之介のように、「民主的時代の民衆は、心より藝苑に至るの途を知らぬ咀はれた思想上の賤民である」（『転身の頌』序・五）くらいのことを言ってもいいはずである。）

三 悲観主義者がなぜこんなに多いのか？

私は文化の商業化とグローバルゼーションは文化を貧しくするのではなく逆に豊かにしていると論じてきたが、それにもかかわらず、古今東西を問わず知識人や芸術家の間でも一般人の間でも、同時代の文化の低下を嘆く悲観主義の方が強い。自分が生きている時代の文化的繁栄を喜ぶことはナイーヴな態度のように思われがちなのである。その原因はどこにあるのだろうか？

最初に思いつくことは、批評家や教育者などの文化的エリートは伝統的な文化を利用して自分たちの社会的な威信を保持しているために、新しい文化の価値に対して目をふさがちだということがある。また彼らは訓練を積んだ少数の「目利き」にしか理解できないような芸術的価値を尊重することによっても、自分たちを無教養な大衆から差別

化できるので、ロー・カルチャーよりもハイ・カルチャーを重視しがちである。このため彼らは文化の商業化に敵意を持つ傾向がある。また人々が多様な文化的産物に接しうようになったためにそれまでの閉鎖的な市場における独占的あるいは寡占的な地位を失ってしまったローカルな生産者も、グローバリゼーションを呪うだろう。さらに文化的悲観論者の中には、商業文化を芸術の観点から評価するのではなくて、その背後にあると考えられる市場経済や西洋文明に対する反感から非難する人も多い。このような人は、ハリウッド映画を芸術的な価値の乏しさゆえに嫌うのではなくて、アメリカの大資本が制作したから嫌うのである。

確かにこれらの要素も実際には文化的悲観主義の原因になっているだろう。だがこのような利己的な動機や政治的考慮は本稿の関心の外にあるので無視することにした。それに対してもっと尊重すべきなのは、本当に文化的価値への配慮から来る悲観主義だが、この種の悲観主義に対しても、以下の考慮によってかなりの程度まで反論することができる。

同時代よりも過去の文化の方がすぐれているように見えるのには、いくつかの原因がある。第一に、我々は同時代の文化作品についてはピンからキリまで存在を知っている一方、専門的な研究者でもなければ、過去の作品については、批評によってまた物理的に選ばれて残ってきた作品しか知らないのが普通である。その結果我々は、過去の時代の作品も現代と同様に玉石混淆だったろうということを忘れて、過去の芸術のレベルを過大評価しがちである。

それに加えて、自分と同時代の文化を過去のすべての時代の文化と比較してしまうならば、前者はどうしても見劣りする。「同時代」の長さを何年間あるいは何十年間にとろうが、それよりも過去の時代全体の方がはるかに長い。だから、優れた作品が現代よりも過去に多いのは当然なのだが、我々は過去の時代の長さを実際よりも短く錯覚がちである。さらに文化の特定のジャンル内部で評価する場合、現代と比較される時代は、そのジャンルの発生期でも

衰退期でもなく最盛期であることが普通である。その場合、現代が最盛期より低く評価されるのはやむをえないことである。文学史上のどんな時代も、杜甫や李白や王維が活躍した盛唐やイギリスのロマン主義の時代と比べたら詩作隆盛の時代とは思われないだろう。

最後に、芸術作品の中には、それを享受するために鑑賞者の側にある程度の予備知識や親炙が必要なものも多い。定評ある過去の「古典」や「名作」は、前もって鑑賞者にそのような準備があるために高い評価へのハードルが高くないが、現代の作品、特に前衛芸術は事情が違い、一般人に違和感を抱かせることも多い。このために、新しいジャンルや表現方法を作り出すような革新的芸術が十分評価されるに至るには時間がかかる。(もつともその一方で、すでに定着したおなじみの芸術ジャンルや、予備的学習を必要としないロー・カルチャーでは、同時代の作品の方が親しみやすいために、高く評価されやすく、よく売れる。)

これらの原因によって、特にハイ・カルチャーの領域では文化的悲観主義が幅をきかせがちである。この態度は過去の文化的作品の価値を認識させるという点では有意義だが、その一方では、文化の領域において権威主義的な評価態度を助長するという弊害をもたらす。特にこの悲観主義が社会的なエリート層の中で有力になると、それは文化に対する公的介入を正当化するために濫用されかねない。

(本節全体について Cowen [1998] ch. 5 を見よ)

4 楽観論の部分的留保

ただし私は、現代の商業文化を無条件で賞賛するつもりはない。そこには文化的価値の観点から見て無視できない

問題点もある。

一 同時代性の崇拜

商業文化は同時代の作品ばかりをもてはやし、過去の作品を軽視あるいは無視させる傾向がある。というのは、文化産業は文化の享受によって人々が得る有形無形の利益それ自体ではなくて、製品の消費によって得られる供給側の利益を求めているために、公共財になってただで享受できる作品ではなく、商品化された作品を宣伝し、過大評価させようとする傾向があるからである。それどころか文化産業の中には、自分たちの利益を最大化するために著作権の期間をできるだけ延長させようと政治に働きかける者さえ多い。それは人々がただで文化にアクセスする機会を妨害するのである。

同時代の作品の過大消費と過去の作品の過小消費というこの事態を一層推し進めるのは、多くの人々が芸術の享受において求めるものは知的あるいは芸術的な経験だけでなく、あるいはそれ以上に、同時代人との連帯感・一体感だということである。人は時勢に遅れないために、あるいは同じ社会に生きているという実感を味わうために、新刊書を読んだり新作映画を見たりする。この事情は特に音楽で顕著なようである。自分が生まれる前の流行歌を聞こうとする人は多くない。また同じ原因から、人は外国の文化作品よりも自国の作品を好んで消費する傾向もある。このような消費者は過去や外国の作品からの新鮮な刺激を受けず、知らず知らずのうちに自分の芸術的・知的感受性をせばめていくのである。

同時代性の崇拜のため、人々の鑑賞眼が歪んで過去の作品を過小評価したり無視したりすることは嘆かわしい。それに現代の作品ばかりに関心を集中することは、なんとという時間とエネルギーと金銭の浪費だろうか。シヨールペンハ

ウエルの次の文章は現代にもあてはまる。

あらゆる時代、あらゆる国々には、それぞれ比類なき高貴な天才がいる。ところが彼ら読者は、この天才のものをさしおいて、毎日のように出版される凡俗の駄書、毎年蠅のように無数に増えていく駄書を読もうとする。その理由はただ、それが新しく印刷され、インクの跡もなまましということに尽きるのである。……人々はあらゆる時代の生み出した最良の書物には目もくれず、最も新しいものだけを常に読むので、著作者たちは流行思想という狭い垣の中に安住し、時代はいよいよ深く自らの作り出す泥土に埋もれていく。(ショーペンハウエル
「一九六〇」九七ページ)

ナボコフはその反対の「素晴らしい読者」の普遍主義的態度を称えて次のように言った。

彼は特定のどのような国家、どのような階級にも属さない。「……」彼が小説を好むのは、仲間と協調してやっていくのに役立つからではない。「……」

旧ロシアの文化に生きたロシアの読者たちはもちろんプーシキンやゴーゴリを誇りとしていたが、シェイクスピアやダンテ、ボードレールやエドガー・アラン・ポー、フローベールやホメロスをも同じように誇りにしていたのであって、これがロシアの読者の強さだったのである。(Nabokov [1981] 邦訳一五——一六ページ)

しかし同時代の文化作品の過大消費は悪いことだけではないと擁護できるかもしれない。というのは、人々が内容

にかかわらず古典よりも新しい文化的商品を消費する傾向があるために、かつてよりもはるかに多くの文筆家や芸術家が生計を営むことができ、そのことは現代の文化的生産の質を上げているかどうかはともかくとして、少なくとも生産量は増大させているからである。そして生産量が増えれば、平均の水準は下がっても、全体の中ですぐれた作品の絶対数は増えるかもしれない。このことは、福利主義的観点からはともかく、作品中心的観点からは肯定的に評価されるだろう。

二 個性の崇拜

商業文化のいま一つの問題として、それはユニークさと個性を過大評価する傾向があるように思われる。文化商品というものは、一定の品質さえ保証されていれば安ければ安いほどよい画一的な財とは違って、個々の個性が重要である。さらに生産者が知的財産権の侵害を回避しようとするためもあって、文化産業は商品をこれでもかこれでもかと差別化し、しばしば些細なほどの個別的特徴を強調するからである。その一方、非個人的で普遍的な価値は退屈なものとして過小評価される。かくして現代の商業文化では古典主義的美学ではなくロマン主義的美学が幅を利かせている。この傾向が行き着くところ、人類に普遍的な価値でなく、それどころか特定の人々に訴えかける価値ですらなく、単に个性的であるとか自己表現であるというだけのことが重要であるかのように考えられがちである。これに自分の進んだ美意識をひけらかしたいという文化エリートの欲求が加わると、ハイ・カルチャーでもロー・カルチャーでも個性の崇拜が一層幅を利かせることになる。

それと軌を一にして、文化に関する今日の議論では多様性がそれ自体として価値あるものと考えられる傾向がある。しかし文化的な多様性がよいことであるのは、人々が現実問題として持っている多様な価値観や世界観や目的を尊重

するためである。第3節一で述べたように、文化的多様性は人々の意に反して押し付けられるべきものではない。それなのに文化的多様性に関する議論では多様性自体が無条件の価値であるかのように論じられがちである。

かくして現代では個性の崇拜が個人レベルでも集団レベルでもはびこっている。このことは現代の芸術を、冷静な評価を受け入れない独善的なものにしがちだという欠点がある。それは誰もが持っているとはまでは言わなくても多くの人々が持っている美意識や価値に訴えかけず、一部の人のだけの支持を求めるのである。

しかしこの事態は、人々が芸術文化に現実にくめていっているものが何であるかを考えると、あながち非難ばかりはできない。なぜなら人々はそこで芸術作品の鑑賞だけでなく、消費を通じての自己イメージの形成をも求めていることが多いからである。このことはロー・カルチャーにもハイ・カルチャーも同じようにあてはまる。ロックの演奏会場で立ち上がり歓声をあげる聴衆は、単に音楽を聴くためにそこに来たわけではない。彼らは自分がその特定のアーティストの支持者であることを自他に対して力強く表現しているのである。クラシック音楽の聴衆の態度はそれと正反対だが、彼らが会場にきた動機は似ているかもしれない。彼らの多くはコンサートを聴きに行くことによって、高尚な芸術の愛好者・理解者であるという自己イメージを保とうとしているのかもしれない。芸術市場はこのような自己イメージを形成しようとする欲求の実現を助けている (Cowan [2007] ch. 4 を参照)。

ところで本節における私の懸念は、前の第2―3節における消費者主義的な商業文化礼賛とは対立すると考える人もいだろう。私が本節で同時代性と個性の崇拜を批判してきたのはエリート主義的な文化観に立つように見えたかもしれないからである。しかし私が本節で言いたかったことは(今日の人々の多くはこの二種類の崇拜からもっと自由になれば、いっそう大きな喜びを文化——ハイであれローであれ——の享受から得られるだろうから、そうした方が賢明だ)ということである。この提言は商業文化やグローバリズムとは全然矛盾しない。もし前記の二種類の崇拜

から自由であることが文化的エリートの特徴だとしたら、私は喜んで「エリート主義」という特徴づけを受け入れるが、それは大衆への軽蔑やスノビズムからではなくて、文化への真摯な関心から来たものである。

5 結語

私は本論の前半で市場経済とグローバリゼーションは文化の発展を促進する傾向が強いと主張する一方、前節では、文化の商業化がもたらす問題についても触れた。しかし私は全体として、文化の商業化を制約すべき十分な理由は存在しないと考える。なぜなら、文化の商業化とグローバリゼーションに対する批判の最大の弱点は、民間での自由放任に代わるべき説得力ある代替案を与えられない、ということだからである。グローバル化した商業文化の現状を批判的に見る人でも、政府は全能で国民に対して私心なき善意を持つていると信じていない限り、民間に代わって国家が文化を統制したり文化的自給自足政策をとったりすべきだとは主張しないだろう。国家による文化統制は、個々人——それが文化の創造者であれ享受者であれ——の価値観や世界観や目的や感性や自発性やさらには趣味が可能な限り尊重されるべき領域における、政治的・行政的権力の濫用になってしまいうだろう。

もともと（国家による統制ではなく助成ならば、芸術や学問の発展を助けるが、それに対する介入にはならない）と主張する人は多いかもしれないが、助成にも次のような問題がある。

第一に、政府機関が文化の領域で価値判断する能力を疑い、公的助成が文化を振興するということを端的に否定する人もいるだろう。だが私はそのようには考えない。公的支援が文化を助けることもあるという事実を否定する必要はない。

しかし公的支援は納税者の懐から出るものである。公的支援をすればするだけ、納税者は自分が使いたいように財

産を使うことを妨げられる。つまり公的支援と私的な消費とはトレードオフ関係にある。(ここで私は単純化のために、政府が文化支援のために公金を支出しなければその分だけ納税者は税金を取れないと想定している。) それでももし文化的産物がすべて公共財ならば、そのための政府支出は正当化しやすいが、実際にはそうではない。有形の文化作品は排除可能な財である。またごく限られた人にしか興味を抱かせない作品も多い。とはいえたえそうであっても、今日多くの人々は文化というものに対して尊敬の念を持っているから、豊かな社会では、ある程度まで文化への公的支援は民主的決定によって支持されるだろう。

だが文化への支援は「善についての公権力の中立性」という自由主義的理念と衝突しがちである。文化への支援はいくら一般的になろうとしても、実際には何らかの選別を伴わざるをえない。政府はある美意識や価値観を別のものよりも優先させることになるのである。ところが国家による文化支援を提唱する論者の中には、この問題を気にかけないような人が多い。

たとえばベンジャミン・バーバーは参加民主主義の立場から、芸術への公的支援がなければ市民社会は多様性や創造性や想像力や自発性を失ってしまうという理由によって、ハイ・カルチャーかロー・カルチャーかを問わない豊かな支援を提唱する(Barber [1998] ch. 3)。私はこの議論に納得できない。芸術が民主的市民社会にとって不可欠だという主張は経験的裏付けに乏しい独断的主張のように思われる。またその議論は下手をすると特定の政治思想に結びついた芸術だけを優遇する危険がある。バーバーは公共精神から完全に解放された耽美的で貴族主義的な芸術をも国は支援すべきだと考えているのだろうか? またロナルド・ドゥウォーキンは、「芸術は共同体全体に一般的に寄与する」という意味で芸術は公共的な善であるとして、オペラのようなハイ・カルチャーへの国家的支援を正当化しようとする(Dworkin [1985] ch. 11. 引用は p.225 から)。彼の文化観はバーバーよりもエリート主義的である。ド

ウウォーキンとは「ハイ・カルチャーの一般的カルチャーあるいはポピュラー・カルチャーへの影響は互恵的である」と言つてロー・カルチャーにも口先では敬意を示すが、実際にはハイ・カルチャーのもたらす外部効果しか強調しない。彼が考える文化の構造は階層的であり一方的である。そこでは高い文化は低い文化に形式と価値を与えるが、その逆は成立しない。私はロー・カルチャーに対するドウウォーキンの恩着せがましい態度に賛成しない。ロー・カルチャーにはハイ・カルチャーとまた違った価値があり、そして前者が後者に有益な影響を与えることもある。しかしだからといって、私はエリート主義的な文化政策に反対してポピュリスト的な文化政策を提唱するつもりもない。私が提唱するのはむしろ〈国家と文化の分離〉である。なぜなら文化への公的支援は、実際には権力をもった者が自分たちの支持者と仲間に利益を与えるために利用されてしまうだろうからである。文化への公的支援には最大の慎重さが求められる。(それでも公的支援がなされるべきだとしたら、それは文化の生産への支援よりもその享受への支援という形をとる方が、まだ中立的で望ましいだろう。)

我々はむしろ私人や私的団体による支援に期待すべきである。それが可能であるくらい市民社会は豊かである。文化への国家的支援を提唱する人々は、公的支援がなければ今にも文化が減びてしまうかのように語りがちだが(ドウウォーキンの前掲論文の末尾の言葉は「我々の文化のかよい構造」である)、私は文化をもっとたくましい生命力のあるものだと考えている。そして文化の商業化に伴う弊害への対策としては、政府による介入を求めるよりも、前節の末尾で述べたように、我々自身が賢い消費者になつて冷静に文化商品を評価し、一時の流行に流されないよう努めるべきである。

だが事実問題として見ると、国家が自国の文化芸術を支援するということはごく普通の事態で、その目的は多くの場合、国威宣揚あるいはお国自慢である (Abbing [2002] esp. ch. 10)。多くの政府の文化政策は、人類全体はおろ

か、自国民の文化的需要に応えるためというよりも、国際的威信の向上（および国民の精神的統合）を目的としているようである。だからこそ公的文化政策はその国独自の伝統文化を振興したり、大衆文化やサブカルチャーよりもハイ・カルチャーを優遇したり、ノーベル賞の獲得を目指したりする傾向がある。スポーツを国家が支援する理由の一つも、それが国家単位でわかりやすく名誉を競う場だからだろう。政府も国民も、オリンピックで自国選手が取るメダルの数に一喜一憂する。ついでに言えば、軍備も仮想敵国からの自衛といった軍事的な理由だけでなく国威発揚という動機が大きい。他国から侮られたくなくて核兵器を開発・所持する国もある。だが私は国威宣揚を政府の活動の正当な根拠とはみなさないで、そのための文化支援（及び軍備）には賛成できない。

またこの文化的国威宣揚論も、バーバーの民主的市民社会論も、いずれも文化を公的な価値のための手段とみなす点で、本稿の問題意識とは異なる。私は実際のところ、芸術と文化を政治的な観点からしか見ないこれらのアプローチに索然たる思いを禁じ得ない。芸術や文化の独自の価値はそんなところにはない。

最後に本論が法の継受・移植にとつてどのような含意を持つかを考えてみよう。

グローバリゼーションは文化を破壊しない、むしろ世界中で繁栄させている、という本稿の主張は法の移植の可能性と望ましさを支持するように思われる。というのは、この主張は文化の可塑性と普遍性を指摘することによって、〈法は社会構成文化の中に埋め込まれているから外国や異なった文化圏の法を導入することは失敗に終わらざるをえない〉という個別主義的見解への反論となるからである。だから私の立場は〈法というものは社会構成的文化に深く埋め込まれているから法の移植は失敗に終わらざるを得ない〉という民族主義的見解と対立する。法の歴史を見れば実際には、古代ローマや前近代の中国や現代以前のイギリスのようないくつかの民族の法体系は他の法体系とおおむね独立に発展してきたが、大部分の法体系は他の発展した法体系からふんだんに觀念や制度を借りることによって発

展してきた (Watson [1993], [2001], [2008])。日本法の歴史はその好例である。また比較法学者のツイン・マンによれば、今日のヨーロッパ各国の私法はすべて大陸のシヴィル・ローとイギリスのコモン・ローとの混合法体系であり、さらに前者の大陸債権法自体が、ローマ法、固有の慣習法、カノン法、商事慣習、自然法という五つの要素の混合物であり、これら五つの要素自体も独立して発展したわけではない (Zimmermann [2001] 邦訳一五八―九ページ)。サヴィニーには悪いが、法は必ずしも民族精神 *Volksgeist* の表現ではない。

しかし法と文化の相違も過小評価してはならない。文化の創造と享受は国家による介入から離れて個々人が行うべきものだが、伝統的な法観念によれば、法体系というものはその性質上国家的制度である。法制度は公権力の行使にかかわる国家制度である。人は自分に関心のない文化にかかわりあいになる必要はないが、自分が住んでいる国の法制度にはいやでも拘束される。多様な文化が国境を超えて繁栄しうるが、法は一国内部での統一性を要求する。国内法から独立した法の脱国家化は、グローバルな商慣習法や国際人権法などの領域を例外として見出しにくい (Teubner [1997] を参照)。

それでも現代のようにグローバリゼーションが進んだ世界では、国家ごと地域ごとに法制度が別々であるということと自体が不便になりかねない。このことが、社会文化と密接に関係した親族法や政治体制と結びついた公法などと違って、商取引法の国際的統一が進んでいることの原因である——もともとこのような国際的統一もたいいてい国家機関によって行われるのだが。また世界中で共通の法観念、特に「法の支配」の観念も、書物の中でも社会実践の中でも追及されるべきである。私は法理論と法哲学の学者間の知的な交流がいくらかでもこの過程に寄与することを願ってやまない。

*本稿は二〇〇九年九月十五日から二十日にかけて「グローバルな調和と法の支配」の総合テーマの下、北京で開かれた第二十四回法哲学・社会哲学国際学会連合（略称・IVR）世界会議（XXIV World Congress of Philosophy of Law and Social Philosophy）の全体会議（plenary sessions）に招待されて行った英語の報告“Globalization and Cultural Prosperity”の増補日本語版である。この全体会議については『一橋法学』九卷一号（二〇一〇年三月刊）にレポートを書いた。またその直前の九月十三日に上海交通大学凱原法学院が上海で開催した国際シンポジウム「二十一世紀の中国における『法と社会』運動」（International Symposium on “Law and Society” Movement in China for the 21st Century）にも招かれて、英文報告の短縮版を発表した。

参考文献（本文中言及のないものも少数含む）

伊豫谷登士翁 [2002] 『グローバルゼーションとは何か』平凡社新書

大江洋 [2003] 「文化的危機と諸相と対応」『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』第53巻第2号（Cowen [1998] <の言及あり>）

大江洋 [2004] 「文化楽観主義とコーエン説の検討から」『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』第54巻第2号

金森久雄・荒憲治郎・森口親司（編） [2004] 『有斐閣経済事典 第4版』

ショーベンハウエル [1960]. 『読書について』斎藤忍随訳、岩波文庫

アマルティア・セン [2009]. 『グローバルゼーションと人間の安全保障』加藤幹雄訳、日本経団連出版

仲重人 [2001]. 「書評」 (Cowen [1998] の) 『公共選択の研究』第36号

森村進 [2004]. 「みんなのものは誰のもの？」安彦一恵・谷本光男（編）『公共性の哲学を学ぶ人のために』世界思想社

Abbing, Hans [2002]. *Why are artists poor? The exceptional economy of the arts*. Amsterdam U. P. (トビント) 『金と芸術』山本和弘訳、グラムブックス・2007年）

- Bhagwati, Jagdish [2004]. *In Defense of Globalization*. Oxford University Press. (バグワティ『グローバリゼーションを擁護する』鈴木主税・桃井緑美子訳、日本経済新聞社、2005年)
- Barber, Benjamin R. [1998]. *A Place for Us: How to Make Society Civil and Democracy Strong*. Farrar, Strauss and Giroux. (バーバー『「私たち」の場所』山口晃訳、慶応義塾大学出版会、2007年)
- Bryman, Alan [2004]. *The Disneyization of Society*. Sage. (ブライマン『ディズニー化する社会』能登路雅子・監訳、森岡洋二訳、明石書店、2008年)
- Chanda, Nayan [2007]. *Bound Together: How Traders, Preachers, Adventurers, and Warriors Shaped Globalization*. Yale University Press. (チャンダ『グローバリゼーション 人類5万年のドラマ 上・下』友田錫・滝上広水訳、NTT出版、2009年)
- Cohen, Tyler [1998]. *In Praise of Commercial Culture*. Harvard University Press.
- Idem [2000]. *What Price Fame?* Harvard University Press.
- Idem [2002]. *Creative Destruction: How Globalization Is Changing the World's Cultures*. Princeton University Press.
- Idem [2007]. *Discover Your Inner Economist*. Dutton. (ローレン『インサンティン』高遠裕子訳、日経BP社、2009年)
- Dworkin, Ronald [1985]. *A Matter of Principle*. Harvard University Press.
- Frank, Robert H. and Cook, Philip J. [1995]. *The Winner-Take-All Society*. Free Press. (フランク・クック『ウィナー・テイカー・オール』「ひびり勝ち」社会の到来』香西泰訳、日本経済新聞社、1998年)
- Friedman, Thomas L. [1999]. *The Lexus and the Olive Tree*. Farrar, Straus and Giroux. (フリードマン『レクサスとオリヴの木 上・下』東江一紀・服部清美訳、草思社、2000年)
- Idem [2007]. *The World Is Flat: A Brief History of the Twenty-first Century*. Further Updated and Expanded Edition. (フリードマン『フラット化する世界 上・下』伏見威蕃訳、日本経済新聞社、2008年)
- Gray, John [1998]. *False Dawn: The Delusion of Global Capitalism*. Grant Books. (グレイ『グローバリズムという妄想』石塚雅

- 彦訳、日本経済新聞社、1999年)
- Horkheimer, Max and Adorno, Theodor W. [1947]. *Dialektik und Aufklärung*. (ホルクハイマー、アドルノ『啓蒙の弁証法』徳永 恂訳、岩波文庫、2007年)
- Hume, David [1985]. *Essays Moral, Political and Literary*. Edited by E. F. Miller. Liberty Fund.
- Klein, Naomi [2000]. *No Logo*. Picador. (ナタリー・ブレンデマン、くらなご』松島聖子訳、はまの出版、2001年)
- Kymlicka, Will [1995]. *Multicultural Citizenship*. Oxford U. P. (キムリカ『多文化時代の市民権』角田猛之ほか訳、晃洋書房、1998年)
- Leadbeater, Charles [2002]. *Up the Down Escalator: Why the Global Pessimists Are Wrong*. Penguin. (レッシュビーター『それでもグローバルイズムだけが世界を救う』山本暎子訳、タニヤギンズ社、2003年)
- Lechner, Frank J. and Boli, John (eds.) [2008]. *The Globalization Reader*, 3rd ed. Blackwell.
- Meadowcroft, John [2005]. *The Ethics of Market*. Palgrave.
- Mises, Ludwig von [1972] (1956). *The Anti-capitalistic Mentality*. Libertarian Press.
- Nabokov, Vladimir [1981]. *Lectures on Russian Literature*. Weidenfeld and Nicolson. (ナボコフ『ロシア文学講義』小笠原豊樹 訳、TOBブリタニカ、1982年)
- Norberg, Johan [2003]. *In Defense of Global Capitalism*. Cato Institute.
- Palmer, Tom G. [2009]. *Realizing Freedom. Libertarian Theory, History, and Practice*. Cato Institute.
- Radbruch, Gustav [1955]. *Rechtsphilosophie*, 5 Aufl. K. F. Kohler. (『ローレンプフ著作集 第一巻 法哲学』田中耕太郎訳、東京大学出版会、1961年)
- Ritzer, George [2004]. *The McDonaldization of Society*. Revised New Century Edition. Sage. (リッツァ『21世紀新版 マクドナルド化した社会』正岡寛司訳、早稲田大学出版部、2008年)
- Robertson, Roland [2007]. "Glocalization", in *Encyclopedia of Globalization*. Routledge.

- Stiglitz, Joseph [2002]. *Globalization and Its Discontents*. W. W. Norton. (ステイグリッツ『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』鈴木主税訳、徳間書店、2002年)
- Teubner, Gunter (ed.) [1997]. *Global Law without a State*. Dartmouth.
- Tomlinson, John [1991]. *Cultural Imperialism: A Critical Introduction*. Pinter. (トムリンソン『文化帝国主義』片岡信訳、青土社、1997年)
- Idem [1999]. *Globalization and Culture*. Polity Press. (トムリンソン『グローバリゼーション』片岡信訳、青土社、2000年)
- Watson, Alan [1993]. *Legal Transplants*. 2nd ed. University of Georgia Press.
- Idem [2001]. *Legal History and a Common Law for Europe*. Olin Foundation, Stockholm.
- Idem [2008]. *Comparative Law: Law, Reality and Society*. Second Enlarged Edition. Vandeplas Publishing.
- Wolf, Martin [2004]. *Why Globalization Works*. Yale University Press.
- Zimmermann, Reinhard [2001]. *Roman Law, Contemporary Law, European Law*. Oxford University Press. (シンンブーメン『ロー民法・現代法・ヨーロッパ法』佐々木有司訳、信山社、2008年)